

2020年度 第2回・中部地方ESD活動支援センター企画運営会議

議事概要

1 日時

2021年1月20日（水）13:30～16:30

2 開催方法

Web会議

3 出席者

（委員）



氏名	所属	役職
伊藤 恭彦	名古屋市立大学 大学院人間文化研究科	副学長
加藤 隆弘	北陸ESD推進コンソーシアム（金沢大学）	ESDコーディネーター（准教授）
杉浦 真理子	株式会社アクト	代表取締役
古澤 礼太	中部ESD拠点協議会（中部大学国際ESDセンター）	事務局長（准教授）
水谷 瑞希	信州ESDコンソーシアム（信州大学教育学部）	助教

※都合により戸成委員は欠席。

（事務局） 福井理事長、清本事務局長、原、富田
（中部地方環境事務所）西田主査

4 議事次第

- ご挨拶 環境省中部地方環境事務所
- 2020年度業務実施状況の報告
 - SDGsチェックリストについて
 - 主催イベントについて
- 第6期（2021～2023年度）に向けて
 - SDGsチェックリストの活用促進について
 - 主催イベントの展開について
 - センターに対する地域ニーズの拾い上げについて
- 意見交換
- その他
- 閉会

5 会議資料 ※委員には出力資料を送付

資料1：2020年度業務実施状況の説明資料

資料2：ESDネットワークフォーラムの開催案内チラシ（2/14開催）

資料3：作成した学生向けコンテンツ

参考資料1：国のESD円卓会議（12月10日開催）資料

参考資料2：2020年度EPO中部／中部地方ESD活動支援センター業務の一覧表

参考資料3：第5期EPO中部運営業務の中間報告（2020年12月時点報告資料）

6 議事録要旨

(1) ご挨拶

【西田主査】

- 本日はこれまでの取組のとりまとめを報告したうえで、さらに、来年度に向けた方向性について御議論いただきたい。
- 事務局による資料確認。
- 以後の議事進行を、座長である伊藤委員に一任。



(2) 2020 年度業務実施状況の説明

(3) 第 6 期 (2021～2023 年度) に向けて

- 事務局による「資料 1」～「資料 3」の説明。
- 西田主査による「参考資料 1」の説明。

(4) 意見交換

【伊藤座長】

- ESD ダイアログについて、開催協力及び登壇した水谷委員からの補足があればお願いしたい。

【水谷委員】

- 11 月 15 日に開催された ESD ダイアログは、ユネスコエコパークを活用した ESD 推進をテーマに開催し、今年度で 3 回目の開催となる。参加者は数として多いといえない人数だったかもしれないが、白山 BR はじめ、全国のユネスコエコパークの関係者や文科省職員などの参加があり、有意義な発信の機会となった。12 月に開催された全国 ESD フォーラム (ESD 活動支援センター主催) でも、この ESD ダイアログについて言及されていた。
- ダイアログの開催後には、参加した教師から ESD や授業方法等についての勉強の機会となり、大変有益だったとの感想をいただいている。
- 次年度以降についても、特定のエコパークのみではなく、中部以外も含めた国内全体のエコパークの交流に焦点をあてた展開などができればと期待している。

【伊藤座長】

- 加藤委員も ESD ダイアログに登壇、参加されて、いかがだったか。

【加藤委員】

- ESD ダイアログには、後半のディスカッション部でコメンテーターとして登壇した。前半には 6 人の登壇者が具体的な学校での取組などをオンラインで発表した。登壇者の話はそれぞれわかりやすくまとめられていた。また、オンライン開催であったため、色々な地域から関係者が気軽に参加できていたようだ。コロナ下ではあるが、こういった交流を進めることが大事であると改めて認識した。
- また、水谷委員が zoom のホワイトボード機能を活用して、同時並行でコメント整理を行ってくれたおかげで、参加者と内容共有しつつ一緒に考えることができ、モデル的な交流イベントになっていたのではと考えた。

【伊藤座長】

- 古澤委員、杉浦委員も今年度業務についてコメント、感想などはいかがが。

【古澤委員】

- 参加はしていないが、ESD ダイアログについての水谷委員、加藤委員の話を興味深く聞かせていただいた。

【杉浦委員】

- できるだけ自粛することに専念しなくてはいけない状況になっているが、センターは頑張ってイベント開催等に取り組んでいたことがわかり、感心した。

【伊藤座長】

- 今回のオンライン開催の体験を、今後も活かして行ってほしい。この情勢下では、ライブでの実施は不可能であるが、オンラインにより、却って参加の枠を拡げられるようになっている。そうしたオンラインの良さと、リアルでできることなどを組み合わせ、今後もこうした企画を展開してほしい。
- 2月14日開催のESD ネットワークフォーラムについて、事務局からの補足をお願いしたい。

【事務局】

- フォーラムについては、SDGs 未来都市の自治体と学生による交流をテーマに企画をした。

【西田主査】

- 特に若者、学生に地域を見てもらうこともテーマになっている。例えば、名古屋の学生が金沢のまちづくりについて考えを述べるなど、地域外に居住する人から見たとき、どう魅力的な「まち」にできるかの視点でも意見交換していただく予定。自治体側から、外部の学生の声、意見を聞きたいというニーズを伺っている。

【伊藤座長】

- フォーラムのハブ会場が設営される中部大学のデジタルアースルームへ行ったことがある。設備の整った施設だった。また、フォーラムの企画についても、未来都市の自治体×(かける)大学生というコンセプトが面白いと思った。
- ほかの委員からも、フォーラムに対して質問等あれば発言いただきたい。

【杉浦委員】

- 岡崎市に住んでいるが、2020年に岡崎市もSDGs 未来都市に選定された。しかし、一般市民は皆、そのことを知らない。自治体側は選定に向けて努力、苦勞をされた筈である。自治体の取組を市民の中につなげることも重要であり、市民のSDGs に対する意識向上と、SDGs の裾野を拡げる取組も重視してほしい。フォーラムではぜひ自治体側にそのことをお伝えいただきたい。また、フォーラム以後も、市民へのSDGs 浸透を大事にしてほしい。

【伊藤座長】

- 重要な問題提起をいただいた。自治体内部でも未来都市選定に取り組む部局以外は、無関心のことが多いのではないだろうか。

【事務局】

- フォーラムでは、ご指摘いただいた事項について、事務局、またファシリテーターとして対応に努力していきたい。
- 各自治体に声かけをした際、名古屋は未来都市に今年度選定されたばかりで躊躇されていたが、せっかくなので参加したいと応じてくださった。金沢は市民参加のビジョンづくりを行っており、市民主体でSDGs 活用に取り組もうと頑張っている。富山市も普及啓発に大変力を入れている自治体である。

【加藤委員】

- 確かに金沢市は色々取り組んでいるようだが、あまり表には出てきていない感がある。今回のフォーラムで他地域から刺激をうけることを期待したい。

【古澤委員】

- 12月に開催された全国フォーラムでファシリテーターを務めた時にも思ったことであるが、オンライン開催のイベントでは相互交流が難しい面もある。この点をどのように対応していくことができるか、知恵を共有していきたい。

【水谷委員】

- 未来都市に選定されていない地域の小中学校でも、SDGsをテーマにした総合学習の授業などで、未来都市となっている地域と交流を持ちたいといったニーズを聞くことがある。そういった企画もぜひ考慮いただきたい。

【伊藤座長】

- 今後、教育の場でも展開してみてもどうか。

【事務局】

- 今回のフォーラムに限らず、今後、継続して未来都市が集まる交流会や研究会を実施していくとよいのではと考えている。
- 今回参加する大学生を対象にした、事前インプット用の資料等を作成しているところであるが、データ等の内容のシンプル化が難しいと感じている。小中学生を対象とした場合には、さらにわかりやすくするための工夫が必要と考えられるため、またその時には、色々と助言をいただけるとありがたい。

【伊藤座長】

- SDGs 未来都市にとって、新しい可能性を開く出発点となり得るフォーラムになることを期待したい。
- 次に、SDGs チェックリストを議題としたい。ワークショップで色々な方に活用いただいているとの報告があった。委員から質問等あればお願いしたい。

【古澤委員】

- SDGs チェックリストの作成に携わった者として、チェックリスト活用の様々なトライを事務局が実施していることに感謝したい。全国フォーラムでも、取組発表者の一人がチェックリスト活用した取組事例の報告を行っていた。作ったものが着実に活用されているのだと実感した。
- 高山市と中部大学が連携してSDGsの取組を展開しているが、市役所職員向けの講習会でチェックリストについて紹介したところ、後日に市側から連絡があり、中部大学と連携して、市の総合計画で市独自のチェックリストをつくり、検証等を行っていききたいとの話をいただいた。高山の取組も、SDGsを具体的に活用した事例として宣伝できる材料になっていけばと考えている。

【加藤委員】

- SDGs チェックリストに自分の活動を当てはめて考えていくと、SDGsが身近なものになる。これはセンターにとって大事な武器になり得るツールである。ぜひ、今後も改善を積み重ねてほしい。

【杉浦委員】

- SDGs チェックリストの活用ワークショップの実施地域をみると、日進市での実施が多く、頑張っているという印象をうけた。ぜひほかの市町にも活用を拡げてほしい。

【西田主査】

- SDGs チェックリストに対する反応や評価はとても良い。県庁職員などにもワークショップを紹介したところ関心を持っていただいた。また、県を通して市町村でも関心を持つ地域がみられるようになっている。地域に影響を及ぼすことのできるツールとなっている。

【伊藤座長】

- SDGs チェックリストを作りはじめた頃は、「日本でSDGs?」「SDGsって何?」といった

反応が主であったように思われるが、今日では、SDGs のロゴをテレビ番組や CM 等でも毎日当たり前のように目にするようになってきている。まずは「SDGs を自分ごとにする」必要があるとしてチェックリストを作成したことは先見の明があったと評価したい。また、わかりやすいチェックリスト方式になっているからこそ、導入ツールとしてうまく機能しているのであろう。今まさに必要とされているツールであったといえる。

【事務局】

- 全国フォーラムで SDGs チェックリストを活用した事例の発表者も仰っていたことであるが、チェックリストは SDGs に関心を持つためのきっかけづくりのツールであり、今、課題となっていることは、関心を持ってもらったその先でどうするかにある。難しい課題であるが、SDGs の目標設定や評価等の行えるツールが今後必要になるのではと考えている。2月14日のネットワークフォーラムに登壇する富山市の職員も、未来都市選定から3年目を迎え、3年間の取組をどのように評価すべきかで悩んでいた。自治体のみでなく、事業者についても、評価やパフォーマンス向上等につながる取組を必要としていくであろう。

【伊藤座長】

- チェックから次のアクションとして可視化など、新たな SDGs ツール作成のチャレンジにも期待したい。

【西田主査】

- 文科省の取組は「参考資料1」で説明した通りである。ユネスコエコパーク、ジオパークをESD実践の場として活用していきたいとの意識を文科省側も持っている。
- ESD ダイアログの参加者は、教育現場にいる教員の参加が多かったが、加えて自然保護官にも登壇してもらい、国立公園とエコパークの違いなどを説明してもらった。
- 環境省は地方環境事務所があるが、文科省は地方の出先がない。場合によっては各地域の教育委員会がそれに該当するのかもしれないが、教育委員会は外部の人間が踏み込むことが難しい。今後も文科省・環境省の色のバランスを取りながら、上手く進めていきたい。

【伊藤座長】

- 環境省予算のセンターではあるが、「E（教育）」をどうするかが大きな課題になっている。

【加藤委員】

- 学校、教育委員会の巻き込みは難しいが、重要なことである。学習指導要領に ESD、SDGs が明記され、ユネスコスクールをはじめとする学校側の関心・意識は高まっている。今年は北陸エリアのみを対象にした開催となったが、毎年、北信越エリアのユネスコスクールの交流イベントを開催している。しかし、教師が多忙過ぎることから、毎年、勧誘に躊躇することもある。また、教育委員会は、コロナ対策対応等で特に今年度は多忙であった。教育分野は、全国的に慢性的なマンパワー不足に陥っている。しかし、今後も何とか参加を呼びかけ、交流会合等を開催していきたいと考えている。
- ESD においては、環境に加え、教育及び社会教育分野の参加は重要である。打開策を皆さんと考えていきたい。また、学校等の巻き込みに成功しているイベントの事例等の共有やその発信なども求められているのではないかと。

【西田主査】

- 教育現場への直接の声がけは難しいが、環境省も全国ユース大会を毎年開催し、高校生による環境活動の発表の場の提供を行ってきている。また、中部センター及び EPO 中部では、イベント開催の際に、ユース大会に応募いただいた学校に登壇・参加いただく企画の展開にも取り組んでいる。

【伊藤座長】

- ここで休憩を入れたい。休憩後、西田主査に、第5期業務の取組報告資料について説明いただきたい。

(休憩)

【西田主査】

- 資料「EPO/ESD センター、地方環境事務所のプレゼンス向上に向けた取組結果」の説明。

【伊藤座長】

- 3年間の取組を多面的に説明いただいた。西田主査の説明への質問の後に、次期センター業務について議論していきたい。

【古澤委員】

- 先ほどの説明資料は何か活用されるのか。

【西田主査】

- 事務所内、全国の地方事務所、全国のESDセンター/EPOへ共有するための内部的な資料として作成したものである。

【古澤委員】

- 一般的に公表しても有益な情報も多かった。例えば、SDGs 未来都市は中部エリア内にも多くなってきており、未来都市の選定地域一覧リストなどもウェブサイトで紹介されるとよいのでは。そのほか、これまでに事務所やセンターが蓄積してきたSDGs、ESDの情報を提供するサイトを開設するなど、SDGs、ESDの情報共有の取組を次年度以降の業務に盛り込むとよいのではと考えた。

【西田主査】

- 情報共有の取組の一環として、中部地方環境事務所やEPOのHPにおいて、過去の報告書を掲載することとした。特にEPOのHPは、今年度リニューアルした。また、環境省の地域循環共生圏の取組の基盤にはESDがあると考えている。人口減少社会における「持続可能な地域づくりの担い手の確保」が重要となっている。ESDはその人づくりを目指しており非常に重要な取組と認識している。

【伊藤座長】

- 次年度以降の業務について、まずはイベントに関する内容、テーマ等のアイデアを出していきたい。

【水谷委員】

- 今後の業務検討において、学校を対象にしたコンテンツの提供も視点の一つとしてほしい。エコパーク、ジオパークなどを活用し、ESD、SDGsを踏まえた授業展開に取り組む際、学校側等にとって参考となる情報が提供されることを期待したい。

【加藤委員】

- 主体的な深い学びが重要とされており、子ども達が地域の取組を調べ、発見することのできる、そのポータル機能をもったツールがあると良い。探求の学びではしっかりと考えて、しっかりと聞くことが重要となり、そのためのコーディネートが重要となる。
- また、SDGs 未来都市になって、活動、交流し、そうした取組を発表する場、或いはその意識づけにつながるような場づくりも継続して展開していきたい。
- イベントについては、オンラインと現地開催のハイブリッド型など、配信する方法や集まる方法などを戦略的に活用、採用した展開を期待したい。

【杉浦委員】

- 地域に誇りと自信をもち、認め合うというキーワードが浮かんだ。人や地域にとって良いことに取り組み、地域を好きになる。そうした活動と学校や会社等をつなげていくことが大事

である。

- 自身の事業では、精神障がいがある方と接触することが多い。元々発達障害を患っている方が精神疾患を負ってしまうことなどが多くなっている。SDGsには誰も取り残さないという精神がある。自分のまわりのこと、自分自身のことを認めて、自分に自信を持つことが大事であると感じている。そうしたことをつなげていくことが重要である。生き方をつなぎ、学ぶことでソーシャルビジネスに力を入れる人材が育ち、あわせて、住みよい地域づくりに取り組むような人材が育つのでは。具体的な提案まではできないが、誇りをもつ、自分を認める、自信をもつということを提示できる取組が必要と考えている。
- オンラインであればそうした取組が十分に可能なのではと感じている。オンラインイベントを開催することにより、多くの参加者を得られる。Facebook や YouTube などを活用して戦略的に展開してほしい。
- EPO のウェブサイトがリニューアルされていたが、今は文科省のウェブサイトを見ても、色々とリンクが貼られており、横の連携が進んでいると感じた。明るい未来を感じたい。

【伊藤座長】

- 環境活動のみに邁進するばかりでなく、豊かな人間同士のつながり、自己実現が、豊かな地域づくりの発見につながるの大切なお意見をいただいた。

【古澤委員】

- 自分も EPO のウェブサイトを確認した。EPO のウェブサイトはリニューアルされたが、ESD センターのサイトは変化していない。少なくとも、EPO サイト（の TOP ページに）ESD サイトへのリンクを載せてほしい。
- 全国センターとの関係、EPO との関係はどのようになっているのか。

【事務局】

- 全国センターの運営受託団体は今年度、新しい団体が変わったが、コロナの関係もあり、全国センターの主催会議は全てオンラインで実施されており、まだ直接会ったことがない。
- ウェブサイトは全国センターが開設したものであり、地方センターでは編集等できない部分もある。

【水谷委員】

- 地域 ESD 拠点はどうしていくかについて、方針等に関わる情報はあるか。

【事務局】

- 地域 ESD 拠点の登録は全国センターで一元管理されているが、中部センターと拠点との接触は個々にある。積極的に協力関係を築きたいという団体もあれば、拠点に登録しているのみであるという団体もあるなど様々である。団体によって取り組みたいこと、得意なことなどが異なり、特性に応じた対応が必要と考えている。
- 地域 ESD 拠点についての全国的な戦略については、現時点では共有されていない。

【古澤委員】

- 自分の所属する団体も地域 ESD 拠点に登録している。どこにどういうネットワークがあり、どういう人が集まっているのか関心がある。必要な情報が共有・提供される仕組みがほしい。

【水谷委員】

- 全国センター、地方センター、地域 ESD 拠点といった階層構造を整理し、情報を流通させることが重要と、当初には位置づけられていた。センターのウェブサイトも充実しつつある。当初に目指していたスキームで進められていってほしい。
- また、地域 ESD 登録にしたことによる検証は行われているのか。登録事後の団体へのフォローにも引き続き取り組んでほしい。

【伊藤座長】

- 全国と地方のセンターなど、様々なパートナーシップがある中で、当初の枠組みや役割分担

などの整理も必要とされている。走りながら、広げながら進めていくことになるのであろう。

【事務局】

- 地域 ESD 拠点の各登録団体の性格づけができるの良いのではと考えている。今現在は、各団体のモチベーションのポイントもわかっていない。その整理を行うことを今後、提案していきたいと考えている。

【西田主査】

- そうした事務局の意見を、中部地方環境事務所から現状を本省へ伝えたところである。自分たちができることはなにか考え、注力していく必要もある。SDGs チェックリストを活用している地域 ESD 拠点もあるなど、連携可能な団体とは既に連携している。今後も現場で、できることも積極的に取り組んでいきたい。

【福井理事長】

- SDGs チェックリストにより、SDGs に関わる取組方の方向性を考えるツールとしての一つの成果を作りあげることができた。チェックリストは SDGs の我がごと化、気付きのツールとして作成したが、その次のステップも重要である。SDGs のゴールにどれくらい近づいたか、或いはゴールに向かってどのように進めるかなどを考えるツールとしてのリデザインが今後、求められるのでは。その地域がどういう都市で、どういう社会構造をもち、その中で自分達が何に取り組むべきかといった具体のゴールを見つけるための議論ができる素材としていくものが必要である。
- 東京ではなく、それぞれの地域で何を実現するか、各センターでできることを議論しつつ、世代を超えて一緒に考えてほしい。また、地域の実情に適したアクションを、エビデンスベースで考えることが重要となっている。ESD においても GIS そのほかのデータベース等が活用されることで、地域の課題、地域情報をきちんと捉えた上で、地域が次のステップへ踏み出すことができるようになっていくことを期待したい。

【伊藤座長】

- 今年度は新型コロナの感染拡大があったが、コロナを阻害要因として捉えるのみでなく、ESD においては with コロナも見据えていく必要がある。ロックダウンによって地球の環境が良くなったといった話も聞かれるなど、コロナ後の地域社会のあり方、持続可能な社会づくりについて、今、話し合う機会を得ているのだと捉えることもできる。

【西田主査】

- 環境省もオンラインを活用したイベントを積極的に行っている。SDGs 未来都市についても、選定された後にどうしていくか、次のステップのまちづくりのあり方についての議論が求められている。
- 三重県が未来都市に選定されたことをうけて、三重県内の SDGs 推進と国立公園の利用（ワイズユース）をテーマにした会合を EPO 業務で実施した。コロナで疲弊した地域で意見交換を行い、クラウドファンディングなどのオンラインによる資金調達の仕組みについて情報交換を行った。ESD センターでは、愛知県の環境学習コーディネイト業務として、学校と、地域づくりの実践者や企業などをつなぐ業務も実施している。

【水谷委員】

- ジオパークは、ユネスコエコパークよりも ESD の導入が進んでいる。元々、ジオパークの国内の協議会は、ドイツにおける地理教育の取組を参考にして、協議会内に教育をテーマにした分科会を設置した経緯がある。特に糸魚川や伊豆などのジオパークが ESD に先進的に取り組んでいる。次年度以降のセンター業務では、ジオパークやエコパークのみではなく、世界遺産など含めた地域資源への価値づけにつながる仕組みを包括的に活用した ESD をテーマにした取組展開も考えられる。
- センター業務は全般的に SDGs の取組が多いとの印象をもったが、ESD としての取組はど

うなっているのか、今一度、立ち返って考える必要があるのでは。SDGs をテーマ、コンテンツにすることで ESD も普及してきたことは確かである。しかし、SDGs のタグ付けをして終わりではなく、その先へと進めていくことが求められており、そこでは ESD が重要となる。持続可能な社会の構築に向けて、価値観、概念をどのように ESD によって伝えていくことができるか。次の業務展開におけるステップで重視してほしい。

【伊藤座長】

- これまでにも何度か指摘されていることであるが、ESD の「E（教育）」を忘れがちである。今後も「E」をきちんと重視して、センター業務を進めていただきたい。

（５）その他

- 次回は第 6 期初年度にあたるため、次回会議の設定は行わない旨を事務局が説明。
- 西田主査、事務局から、第 5 期 3 年間、本会議委員を務めていただいたことへの御礼。

（７）閉会の挨拶

【福井理事長】

- 本日も熱心な議論をいただき、御礼申し上げる。また、3 年間を通して、多くの示唆をいただき重ねて感謝申し上げます。
- 第 5 期は SDGs チェックリストを通して、SDGs との新しい関わり方を提示することができた。センター運営に着手するスタートの取組として具体の成果を作ることができてよかった。
- コロナの影響により、社会に生じた行動変容の一部は、今後も戻ることがないだろうといわれている。また、引き続き気候変動も問題となっている。多くの人々のマインドが、コロナ以前とは異なっている。そんな人類の危機に対し、センターが SDGs によって新たな価値づくりをなし得ていくことを期待したい。

